能狂言兒童劇第四篇

つんぼと宦官

一幕三場

佐々木綠亭作

特253
382

始

特253
382

清水三重三畫伯挿畫竝ニ裝幀

はしがき

狂言の起原は詳でありませんが喜劇の一形式として室町時代に能の間劇として行はれ後歌舞伎狂言の稱が起つてからこれと區別する爲に「能狂言」と云はれるに至りました。

概ね世間日常の可笑的な事件を脚色したもので諧謔を旨とし諷刺的で平民的であつた爲に、大いに大衆に歡迎せられその發達もいちじるしいものでしたが、しかし凡てが榮枯盛衰の道を辿らねばならぬ樣に「能狂言」もその後あるべき一部に公開せらるゝのみで今日に及びました。然るに近時歐米の文化陶醉より歐米物質精神の弊を脱し、國體再認識、國粹發揚の氣運隆興し、此「能狂言」も次第に普及し且つ狂言特有の明朗性が現代人の心弦に融合し歡迎せらるゝに至りました。

私は私の最も愛する兒童にこの明朗な「狂言」をお贈りすべく筆を執りましたが、何分にも古風なこの「狂言」には云ひ現はせない典雅な味が難解な古語と交叉し兒童には稍もすれば折角の興味を削ぐ懼が多くありますので、なるべく「狂言」の味を損はないやう學校劇に適するやう明朗且つ教育的に

改作しました。幸ひに父兄、先生方の適當なる御盡力により私は私の最も愛する兒童がこの日本精神の汪溢して居る「能狂言」の演出される日を樂しみに致します。

終りに、私のこの企に對して御賛同下された盛林堂主林甲子太郎氏に厚く感謝の意を表する次第であります。

昭和十年十一月　明治節の日に

著　者　識

能狂言兒童劇　第四編

つんぼと盲

一幕三場

佐々木　綠亭　作

舞臺

時　春麗かなある日

所　第一場　主人邸門前
　　第二場　座頭菊市の家
　　第三場　主人邸座敷

主人邸門前は大家の門を、菊市の家は破れ障子、襖などを背景に描く。主人邸の座敷は右寄に金屏風に圖案風の老松を描き、左寄に衝立を立てゝ玄關風に見せる。

登場人物

主人　豪家の旦那さま
つんぼ　聾の太郎
盲　座頭菊市
其他唱歌隊多數

◇開幕◇

第一場　主人邸の門前

（主人　鬚をつけて裃にくゝり袴にて豪家の旦那さまらしく扮装して登場。正面を向く。註……主人をはじめ登場人物は極めて朗らかな氣持でなどらかな音調で演ずる。）

主人（堂々として登場、正前を向いて）エヘン〳〵、罷り出でたる者はこの邊

りに住居を致す物持ちでござる。某、二三日、他所へ用事に參らうと存ずるが身共の使つてゐる太郎は聾で御座るゆえ、あれ一人を置いては誠に邸の留守が心許なう御座る。仍つて、誰か頼む人はないかしら、（首をかしげやゝ考へる、そして思ひ付いたやうに）うむ、さうぢや〳〵あの座頭の「菊市」と申す出入の者がござる故之を呼びに參り、相留守を頼うと存ずる、どれ〳〵急いで參らう。（舞臺をぐる〳〵二三回廻り歩く）幸ひあの菊市、家に居ればようござるが、定めし在宅かどうか、やア何とか申す内にはや、菊市の家の前で御座る。

（此時素早く背景を第二場にかへる）

第二場　座頭菊市の家

主人（トントンと手で戸を叩く眞似をして）これ〳〵菊市家に居らるゝか。

（座頭菊市左端へ登場、坊主頭に着物丈けにて袴は不用の事）

菊市　やア表に誰か案内がある、どなたで御座る。

主人（にこ〳〵として）いや身共ぢや〳〵。

菊市（にこ〳〵として主人近く寄つて）やアこれは〳〵ようこそ御出でなされました、どうぞ奥の方へ。

主人　いや構ふて下さるな、今日はそなたに頼みが御座つて参つたのぢや。

菊市　旦那さま態々御出のそのお頼みとは？

主人　されば、其の事ぢやが、某二三日他所へ用事に参る、それについて身共の使ふて居る太郎は、そなたも御存じの通りのつんぼぢや、それによつて一人で留守をさせる事は誠に心許ない。

菊市（うなづいて）なるほど。

主人　ぢやに依つて、そなたを相留守に頼み度いと思ふて参つたのぢや、來てくれまいか。

菊市　それは〳〵態々恐入つて御座います。幸ひ私も今日は暇の事故、参りませう程に。

主人（喜んで）左樣かそれは忝けない、是非共頼む。

菊市　かしこまりました。

主人　それでは、いざ、参らう〳〵。

菊市　甚だ恐れ入りまするが、私は盲の事故手を引いて下され。

主人　よし〳〵心得た。

（菊市、主人に手を引かれ、主人の邸へと急ぐ）

（舞臺をぐる〳〵と二三度歩き乍ら）

主人　菊市そなた、此頃暫く身共の邸へ見へなかつたが、何とか致したか。

菊市　はい、私も方々へ廻る勤が忙しふ御座りますので、遂御無沙汰を致しました。

主人　兎角、急しいのは結構ぢや。

（二人は道々話し乍ら歩きます）

主人　道も急いだ程に、はやもう宅ぢや。

（二人は主人邸の前に來つた態）

（此時素早く第三場の背景と取換へる）

第三場　主人邸座敷

主人　さア菊市、まづ上れ。

菊市　有難ふ御座りまする。

（菊市、玄關に上つて座る）

主人　これ〳〵聾々々、太郎々々。

（太郎髷をつけくゝり袴丈にて耳に手をあて呆け顏にて登場）

太郎　何ぢや〳〵儂を呼ばるゝか、何の用で御座りまする。

主人　身共は、二三日他所へ用事に參る故、よく留守を致せ。

太郎　（よく聞へず）はア何で御座りまするか、二三日の内雨が降るので御座りまするか、雨が降ると天氣が惡ふ御座りまする。

主人　（苦笑して手をふつて）いや〳〵さうぢやない、誰が雨が降ると申した、こういふわけぢやよつく聞け、いゝか（言葉に力を入れて、分るやうに）身共が二三日他所へゆく、分つたか？

太郎　（うなづいて）わかりました〳〵。

主人　それで留守中、よく注意をしなさいと、いふたのぢや。

太郎　わかりました〳〵「旦那様が二三日他所へ御出なさるからよく留守をせい」といふ事で御座りますか。

主人　さうぢや〳〵、それに又、今菊市も來たのぢやから、二人でよく相談をして、よう留守を致せ。

太郎　（分り顔に）もし旦那さま、菊の花の事なら心配召されるな、儂が大事に〳〵に育てませう程に。

主人　（苦笑して又手をふり大聲で）いや〳〵さうではない、あの座頭の菊市も來てゐるからよく二人で云ひ合つて留守番を致せ、といふ事ぢや。

太郎　（分つたらしく）何んと、あの座頭の菊市も來て居りまするか。

主人　さうぢや〳〵。

太郎　それでは如何にも二人で要心をして、留守をいたしまする。

主人　（玄關の方に向つて）菊市、菊市。

菊市　ハハツ（答へて玄關より廣間に現はる）

主人　然らば菊市、もはや身共出立するほどに、此のつんぼとよく云ひ合つてよう留守をたのむ。

菊市　かしこまりました。御大事に行つていらつしやいませ。

主人　では、頼むぞ（大聲にて）太郎よう留守を致せ。

太郎　かしこまりました。

主人　（退場）

―少し間―

太郎　（獨言し乍ら）扨ても〳〵旦那さまは、あの目の見えぬ菊市を頼むで留守を致させるとは、何とした事か。

（然し聲の事故獨言いつても聲は大きかつた）

菊市　（之を聞きつけて）やア、つんぼ奴、私の事を何かいふて居る、（大聲で）やい〳〵つんぼ〳〵太郎冠者々々。

太郎　（やゝ驚いて）そなた聞へたかア……よく來てくれた。

菊市　（笑つて）其後は久しく逢はぬが御無事で御座つたか。

太郎　（聞へぬのか、とぼけ顏にて）其後はずつとよいお天氣で結構ぢやよ。

菊市　（尙笑つて）つんぼには呆れた、（大聲で）いや〳〵さうではないよ、其後は御無沙汰をした、といふ事ぢや。

太郎　（笑つて）左樣か、久し振りぢや、今日は留守番御苦勞樣で、

菊市　その事ぢや、旦那樣の御賴みゆえ、留守に參つた程に、よう、二人で、相談をして留守をせうぞ。

太郎　さうぢや〳〵よく二人で相談をして留守を致そうぞ。

菊市　だが、若し盜人が這入つたら、そなた、目が見へても耳が聞えず、私は耳が聞えても目は見えず、さて、何としたものであらう。

太郎　何んぢやい？　そなた目が見えるといはるゝか。

菊市　（呆れたやうに）いや〳〵さうぢやない、もし盜人が這入つたら、私は耳が聞えても目が見えず、困つたといふ事ぢや。

太郎　（分つたやうに）うむ、さうか、さうだ〳〵、誠に、そなたの申す通ぢや、何んとせうかな。（腕組んで考へる）

菊市　何んとせうかな。（腕組んで考へる）

――間――

菊市　（はたとひさを打つて）うむ、いゝ事が、考へ付いてござる、妙案が浮んだぞよ。

太郎　その妙案とは？

菊市　私、よつく考へたるに、もし盗人が這入つたらば。

太郎　這入つたらば？

菊市　私が耳で聞きつけて、すぐそなたの膝を突つかうほどに、それを合圖に、盗人を追拂ふ事ぢや。

太郎　何に〳〵、若し盗人が這入つたらば、そなた耳で聞きつけて、その合圖に儂の膝を突つかうといふのか。

菊市　さうぢや〳〵、妙案ぢやらう。

太郎　一段とよい考ぢや、そなたにしては、この考へが少しよすぎる、あハゝゝ、若し盗人が這入つたら、早速膝をつゝけ、儂の腕前を見せてやる。

菊市　心得た〳〵、さてもつんぼにものを云ふには、くたびれる事ぢ

や。

太郎　盲といふものは、仲々智惠の出るものぢや。

菊市　（やゝぢつとしてゐたが獨言して）やあ、少し淋しくなつたゆえ、少しつんぼを惡戯つて遊ばうか、さうだ〳〵、さうしよう、（太郎のそばにゆき膝をつゝき小聲にて）これ〳〵太郎、盗人々々。

太郎　（びつくりして）よつし、心得た、やれ盗人が這入つたのか、おれ樣の腕前を見ろ、（そこらを棒を持つて威張り廻る）　やるまいぞ〳〵。（身振り面白く舞臺をかけ廻る）

菊市　（手を叩いて笑つて）さても〳〵お可笑いことかな、やい太郎、今のは、慰ぢや、戯れぢやつたよ、あアハゝゝ。

太郎　（不思議顏にて）やい、菊市、盗人は居らぬが、どうしたのぢや。

菊市　（大聲にて笑ひ乍ら）今のは戯れぢやつたよ。

太郎　（やゝ怒り顔にて）やい按摩奴、よくも儂を悪戯つたな、憎い事ぢやよつし、それなら今度は、儂が返報をしてやるぞ。（と思案して）やい、菊市、儂は此頃、唱歌と舞踊を習つてゐるが、そなた目が見えるなら、歌ふて舞ふて見せたいのぢや。

菊市　うむ、それは面白からう、目は見えずとも、その唱歌を聞いて樂まう、歌ふて、舞ふて、見せてくだされ。

太郎　よつし、心得た、それなら舞ふぞ、歌ふぞ、ところで、歌や舞の果てた處で、そなたに贊めて貰はねばならぬ。

菊市　なるほど、ほめるほど上手か？

太郎　上手處か、日本一ぢや、そこで終つた處で、そなたの顔を撫でるゆえ、その時、贊めて下され。

菊市　いかにも、贊めてやりませう、舞へ〳〵、歌へ〳〵。

太郎　心得た〳〵、然らば舞ふぞ、歌ふぞ、「羽衣」といふ有名なものぢや。

（太郎、獨唱、舞踊）

（注意　こゝで唱歌隊多勢舞臺横手に整列して唄ふもよろし、又太郎は踊る眞似をして座つて手で板の間を叩くも面白い）

◎羽衣

（1）富士の高嶺を
　　三保の浦
　松原遠く
　　海凪ぎて
　吹くも靜けき

時津風
かもめすい〳〵
飛交ひて
かすみ棚曳く
春けしき

(2)
妙なる薫りを
慕ひつつ
漁師伯龍
濱傳ひ
行けば緑の
松ケ枝に

いとも美し
羅も
誰が忘れしか
有難や

(3)
伯龍喜び
之を見て
我家の寶に
致さんと
持ちて歸らん
その時に
天女現れ

これ申す
その羽衣は
私の

(4)

いと大事なる
ものゆえに
どうぞ御返し
下されと
頼むも聞かず
伯龍は
尚も行かんと
するを見て

天女悲しく
いへるやう

菊市（感心して）うむ、仲々うまいやうだ、それからその時、天女は如何致したか。

太郎さアこの次が益々面白く、又天女の嘆く場面で御座る、先づ落付いて聞きなされ。

菊市よし心得た、次を頼みますぞ。

太郎（又次の唄に移る）

(5)

その羽衣の
なき時は

飛行の術も
失はれ
天へ歸れぬ
このわたし
どうぞあはれと
思し召し
御返しなされて
下されや

(6)
伯龍あはれと
思ひつゝ
さらば返さん

その代り
天人舞を
このわしに
見せ給はれと
云ひければ
天女はほほえみ
うなづきて

(7)
靜かに　羽衣
受取りつ
いと嬉しげに
身につけて

吹く春風に
なびかせつ
あたかも蝶の
飛ぶ如く
いと美しく
舞ひにけり

(8)
伯龍夢と
見惚れつつ
仰げば天女は
羽衣を
ひらり〳〵と

ひるがへし
天へ天へと
昇りゆき
霞の中へと
消えにけり

(9)
我にかへりし
伯龍は
ただ呆然と
眺むれば
松吹く風や
波の音

かもめ飛び交ふ
海原の
空にほんのり
富士の山

太郎　（舞踊終って）之で終ぢや、どうだ菊市、上手で御座らう、（そして菊市の顔を足にて二三度撫でる。眞似丈けにてよろし）

菊市　（足で顔を撫でられたも知らず盛んに拍手喝采をする）さても〳〵仲々上手ぢや。

太郎　（大笑して）あはゝゝ、之はお可笑い事ぢや、目の見えぬ者はあはれなものぢやなア、わしが足でそなたの顔を撫たも知らないで嬉しがる、扨て〳〵面白い事かな、笑止々々。（手を叩いて笑ふ）

菊市　これは、やられたわい、どうも矢鱈に笑ふと思ふたら、私の顔を足で撫てたのか、さても〳〵憎い事ぢや、よつし、その返しに、何か致してやるぞ、（ちよいと思案して）やい聾々、（大聲にて）太郎々々。

太郎　（聞へたが）何ぢや〳〵。

菊市　私、此頃とても愉快な唱歌を稽古したのぢやが、唄ふて聞かそうか、アハゝゝ、そなた耳が聞へたら、唄つて聞かせたいものぢや。

太郎　何んとそなた、面白い唱歌を習ふた、よかろ〳〵、歌へ〳〵。

菊市　よし〳〵、それでは歌はう、そこで歌の終つた處で、私が手をさし上げるゆえ、その時賛めて呉れい。

太郎　よし〳〵、上手なら、ほめてやるぞ。

菊市　上手も〳〵、日本一の上手ぢや。

太郎　自慢は止して歌ひなされ。

菊市　心得た〳〵始めるぞ。

太郎　（一心に耳傾けて聞く）

（菊市、左の童謡を唄ふ）

◎つんぼの太郎

(1) つんつん　つんぼの
　太郎冠者
　片輪のくせに
　　その心
　曲つた臆病

　意久地なし
　ほんに呆れた
　　太郎冠者
　顔を見るさへ
　　おかしいぞ

太郎　（耳に手をあて）何ん〳〵、何んぢや、（幾度も首を左右にまげて）儂の悪口でないかやい。

菊市　（首をふつて）いや〳〵さうぢやないぞ、この次が面白いのぢや、私が手をあげるまでは、だまつて聞きなされ。

太郎　よし〳〵、早くあとを唄へ。

(2) つんつんつんぼの
太郎冠者
つんぼのくせに
早耳で
ある事ない事
聞きたがる
ほんに呆れた
太郎冠者
あははははあはは
おかしいぞ

菊市（童謡、終て手をさし上げて）終りぢや〳〵、賛めなされ〳〵。

太郎（己の事に悪口をいはれたも知らないで）少しは、うまい〳〵。（笑つてほめて拍手する）

菊市（大笑して）アハ、、、、、つんぼといふ者は情ないものぢや、自分の悪口をいはれても、喜んで居るぞ、これはお可笑いぞ〳〵、アハ、、、。

太郎やい〳〵、盲奴、よく笑ふて居るが、儂の事を悪口いふたと見へる、憎い奴ぢや、よし〳〵、又、儂も仕返しの法がある。（心に答へて）

菊市（尚も笑つてゐる）

太郎やい〳〵、菊市、今のそなたの童謡は面白かつた、それで儂も今一度、舞ふて見せるぞ。

菊市あはゝ、仲々自慢ぢやな、よし〳〵、舞へ〳〵、唄へ〳〵。

太郎　それでは、終つた相圖は、先程の通ぢやぞ、又顔撫でるから。

菊市　よし〳〵、心得た。（聞く振りをする）

太郎　それでは始めるぞ。

（太郎は先の「羽衣」の歌を又唄ふ）

（太郎矢張り合唱隊に合はして唄ひ、又踊る眞似をする）

（1）富士の高嶺を
　三保の浦
松原遠く
　海凪ぎて
吹くも靜けて
　時津風

かもめすいすい
　飛び交ひて
かすみ棚曳く
　春けしき

菊市　なんと先程の羽衣か。

太郎　さうぢや〳〵、幾度、歌つても、踊つても、面白からう。

（2）妙なる薫り
　慕ひつつ
漁師伯龍
　濱傳ひ

行けば綠の
松ケ枝に
いとも美し
羅も
誰が忘れしか
有難や

太郎（笑ひ乍ら、菊市のそばに走り寄り、足をあげて、又顏を撫でんとして）
終りぢやゝ、どうだうまいものだらうのう。
菊市（拍手して）うまい〳〵、（といひ乍ら、太郎が又顏を撫てんとしてあげた足を取り引き廻して）やい〳〵、太郎冠者、又足で、私の顏を撫でたな、
やい。

太郎（驚き）これは、何とするぞ〳〵。
菊市そなたのやうな奴は、こうして置いたがよいぞ、アハヽヽヽ。
太郎やい〳〵、菊市、やい座頭の分として憎い奴ぢや。（と云ひ乍ら、座頭の足を取り引き廻す）
菊市（驚き）これは、何とする、目の見えぬ者の足を取つて、何とするぞ。
太郎知れた事ぢや、そなたのやうな奴はこうするのぢや。
菊市（負けずに）やい〳〵、そなたのやうな者は、こうして、やるのぢや。
太郎こらしめぢやゝ〳〵、やるまいぞ〳〵。
菊市逃すまいぞ〳〵〳〵。
（二人はこうして足を取り合ひ乍ら、朗らか聲をつゞける事暫し）

（やがて次の間より。――）

（エヘン〳〵といふやうな人の聲聞ゆ。――）

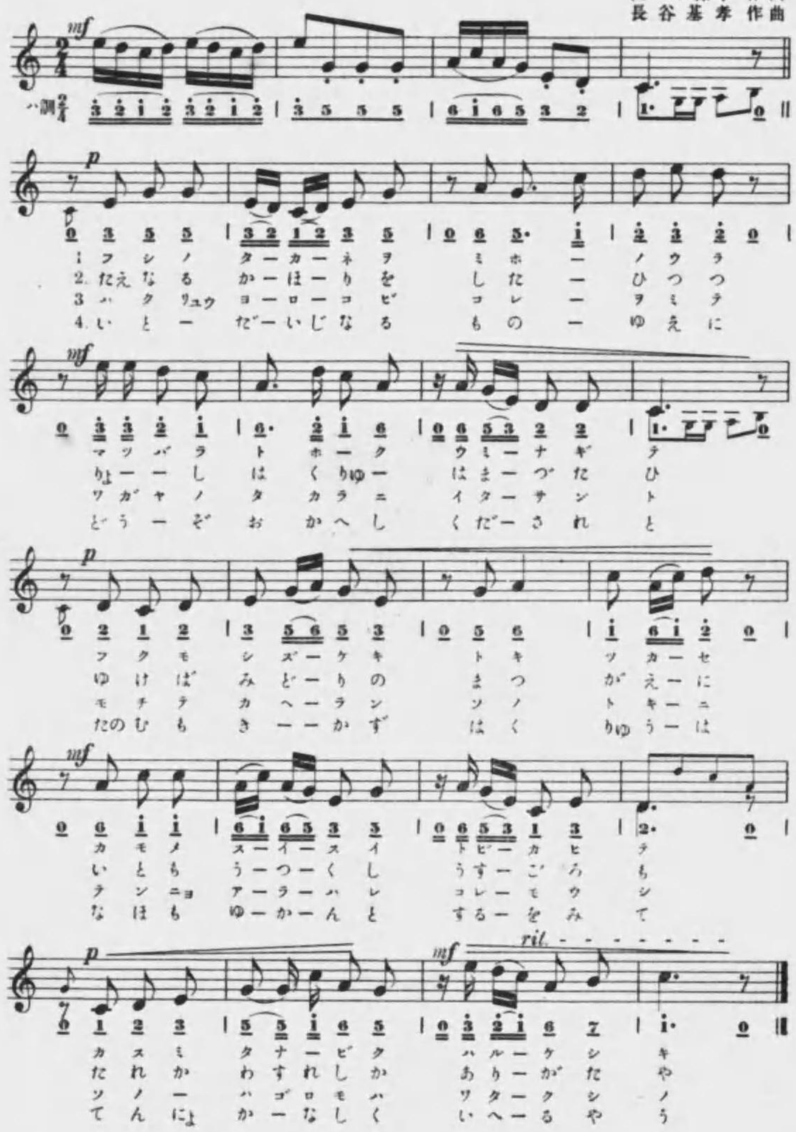
（二人はこの聲に打驚き、あはてゝ争を止め、そこに座つて、かしこるらうとするのだつたが、盲は目が見へぬ事とて、尻と尻を合せて、二人はそこに轉がり、再びあはてふためく、おかしき身振り、數回くりかへして朗らかな動作の裡に）

――靜かに閉幕――

つんぼと盲（終）

羽衣の歌

佐々木綠亭 作詞
長谷基孝 作曲



能狂言兒童劇・種目

一、餅なめ地蔵（四・五年程度）
二、鼠の嫁入り（三・四年程度）
三、箱根の關所（五・六年程度）
四、つんぼと盲（五・六年程度）
五、旅は道連れ（三・四年程度）
六、化け案山子（三・四年程度）
七、四人轉太（五・六年程度）
八、氣塚（四・五年程度）
九、野原の醫者（四・五年程度）
一〇、恩返し（三・四年程度）
一一、國境爭ひ（五・六年程度）
一二、三人旅（四・五年程度）

定價各金五拾錢
送料各金十四錢

昭和十年十二月二十日 印刷
昭和十年十二月二十六日 發行

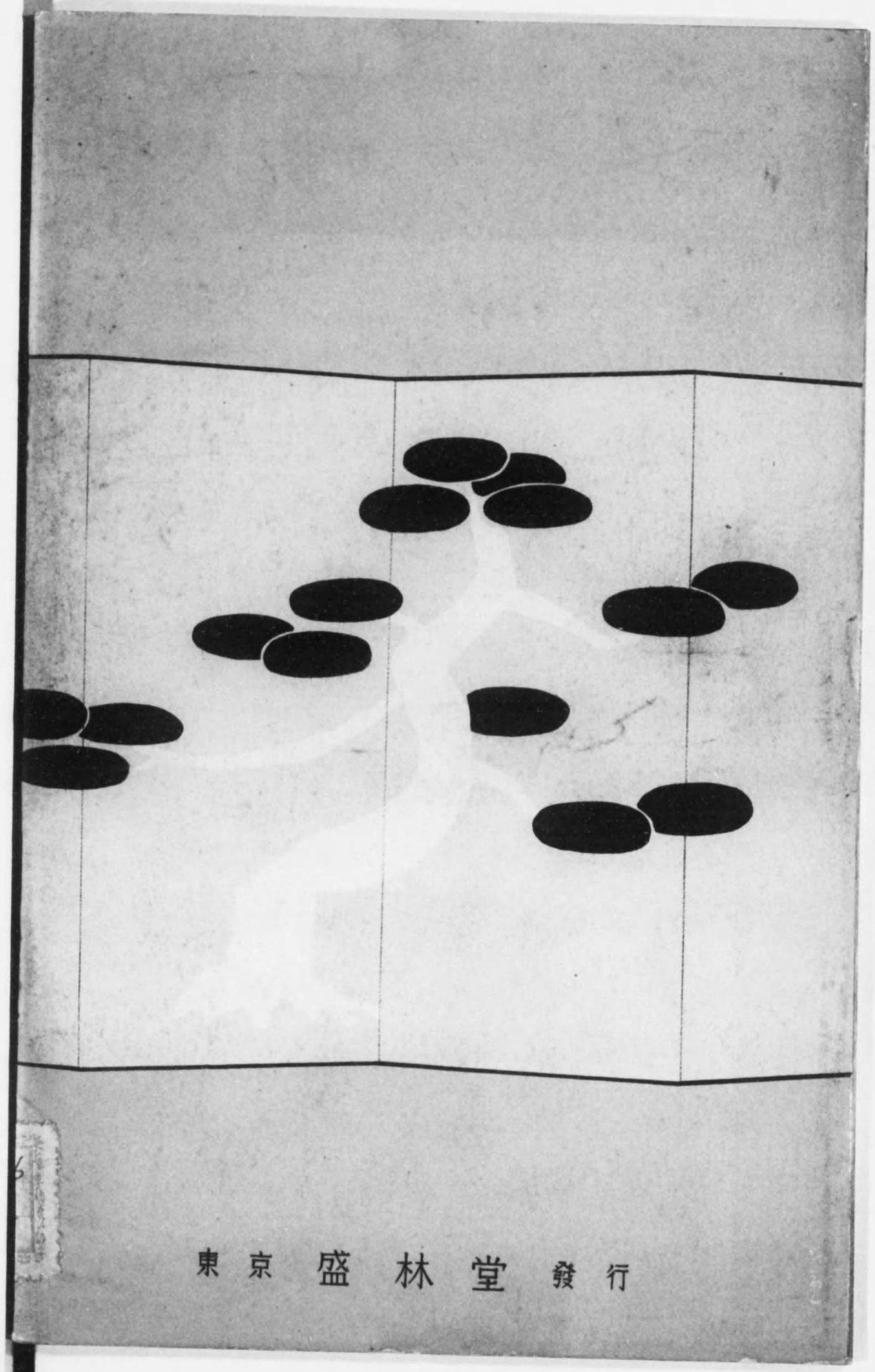
能狂言兒童劇　定價金五拾錢

著者　佐々木綠亭

東京市日本橋區本町四丁目十一番地
表紙禮者
發行者　林甲子太郎

東京市小石川區雲町百〇八番地
印刷者　齋藤栃吉

東京市小石川區雲町百〇八番地
印刷所　三立舍印刷所

發行所　盛林堂書店
東京市日本橋區本町四丁目十一番地
振替東京一八四六番
電話日本橋〇二四一番

終